

## 広島市における感染症発生動向調査結果について(2009年)

### 生活科学部

#### はじめに

広島市では、広島市感染症発生動向調査事業実施要綱に基づき、衛生研究所に感染症情報センターを設置し、市域の感染症情報を集計、解析するとともに、その結果をホームページ等により、市民、関係機関等へ提供している。

今回、2009年の広島市における感染症患者発生状況をまとめたので報告する。

#### 方法

##### 1 対象疾患

対象疾患は、国の実施要綱に示されている一類感染症(エボラ出血熱等7疾患)、二類感染症(急性灰白髄炎等5疾患)、三類感染症(コレラ等5疾患)、四類感染症(E型肝炎等41疾患)、全数把握対象の五類感染症(アメーバ赤痢等16疾患)及び定点把握対象の五類感染症(インフルエンザ等25疾患)の合わせて99疾患とした。

##### 2 患者情報の収集

全数把握対象の感染症については市内医療機関から、定点把握対象の五類感染症については定点医療機関から週単位又は月単位で、各行政区に置かれている保健センターに届出される。各保健センターは、感染症発生動向調査システムにより患者情報を感染症情報センターへ報告し、感染症情報センターでは中央感染症情報センター(国立感染症研究所)へ全市分の患者情報を報告するとともに集計処理を行った。

なお、市内の患者定点の内訳は、インフルエンザ定点(小児科定点を含む)37、小児科定点24、眼科定点8、性感染症定点9、基幹定点7である。

##### 3 対象期間

全数把握対象疾患及び月報対象の定点把握対象疾患については、平成21年1月1日～12月31日とし、週報対象の定点把握疾患は、平成20年12月29日～平成22年1月3日(2009年第1週～第53週)とした。

#### 結果

##### 1 全数把握対象疾患

医療機関から届出のあった疾患は、二類感染症は結核、三類感染症は細菌性赤痢、腸管出血性大腸菌感染症の2疾患、四類感染症はつつが虫病、レ

ジオネラ症の2疾患、五類感染症はアメーバ赤痢、ウイルス性肝炎、急性脳炎、クロイツフェルト・ヤコブ病、劇症型溶血性レンサ球菌感染症、後天性免疫不全症候群、梅毒、風しん、麻しんの9疾患で、合わせて14疾患であった。一類感染症については届出がなかった。2009年における各疾患の届出数を表1に示した。比較的届出数の多かった疾患(結核を除く)は次のとおりである。

##### (1) 腸管出血性大腸菌感染症

38件の届出があり、前年と同数であった。このうち3件が集団事例であった。月別では、9月が9件と最も多く、5月から9月の5か月間に28件の届出があった。血清型別では、O157が33件と最も多く、次いでO121が3件、O26が2件であった。例年と比べて成人の患者が多く、20歳以上が20件と53%を占めていた。

##### (2) 後天性免疫不全症候群

25件の届出があり、前年の18件から増加し、これまでの年間届出数の最高値(2004年の20件)を上回った。このうち、エイズ患者が6件、HIV感染者が19件であった。

表1 全数把握対象疾患の届出数(2009年)

類型	疾患名	届出数
二類	結核	217
三類	細菌性赤痢	1
	腸管出血性大腸菌感染症	38
四類	つつが虫病	4
	レジオネラ症	7
五類	アメーバ赤痢	8
	ウイルス性肝炎	3
	急性脳炎	7
	クロイツフェルト・ヤコブ病	3
	劇症型溶血性レンサ球菌感染症	2
	後天性免疫不全症候群	25
	梅毒	3
	風しん	1
	麻しん	5

(注)2009年4月28日、新型インフルエンザ等感染症として位置づけられた新型インフルエンザ(A/H1N1)届出数は、施行規則の改正(2009年8月25日施行)により、発生届の届出が不要となり、掲載していない。

年齢別にみると、20歳代から40歳代にかけての年齢層が20件と多くなっていた。性別では、男性が24件とほとんどを占めていた。感染経路はすべて性的接触によるもので、同性間が18件、異性間が7件であった。

## 2 定点把握対象五類感染症

### (1) 週単位報告疾患

インフルエンザ定点、小児科定点、眼科定点及び基幹定点から毎週報告される18疾患の報告数を表2に示した。年間の定点当り累積報告数は、インフルエンザの558人が最も多く、続いて感染性胃腸炎334人、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎79.8人、水痘69.0人、流行性角結膜炎61.5人、流行性耳下腺炎41.1人、突発性発しん35.4人、ヘルパンギーナ29.4人、RSウイルス感染症14.5人、マイコプラズマ肺炎13.2人などとなっている。年間の推移に特長が認められたインフルエンザ、感染性胃腸炎、ヘルパンギーナ、流行性耳下腺炎及びRSウイルス感染症について、広島市と全国における週別の定点当り報告数の推移を図に示した。

#### a インフルエンザ

年間の定点当り累積報告数は558人で、前年の109人と比べ前年比5.12と大きく増加した。

2008/09シーズンは、年明けから急増し、第2週に注意報レベル(定点当り10.0人)を超え、第4週には、警報レベル(定点当り30.0人)を超えた。第5週に定点当り36.7人のピークとなった後は減少し、第21週には終息傾向となった。

しかし、7月下旬以降、例年終息しているこの時期としては多い状態が続き、第34週に流行開始の目安とされている定点当り1.00人を超えた。

その後も増加傾向で推移し、特に10月に入ってから急増し、第42週に定点当り11.2人と、注意報レベルを超えた。第44週に定点当り34.6人と、警報レベルを超え、第48週に定点当り40.5人のピークとなり、第49週以降は減少した。

当研究所の検査結果から、7月以降の患者のほとんどは新型インフルエンザ(A/H1N1)と考えられた。2009/10シーズンは新型インフルエンザの出現により、流行時期が例年より非常に早く、昨シーズンと比較すると、流行開始の時期からピークとなった時期まで2~3か月程度早くなった。

#### b 感染性胃腸炎

年間の定点当り累積報告数は334人で、前年の430人と比べ前年比0.77とやや減少した。年間の累

積報告数は、小児科定点患者総数の51.3%を占め、小児科定点報告対象疾患の中で最も多かった。

第2週に定点当り14.8人のピークを迎えた後は10人前後の状態推移したが、6月上旬頃から減少傾向となり、夏季は低い水準であった。例年より遅く12月上旬から増加が始まり、第52週に定点当り9.08人のピークを迎えたが、前年同時期より低かった。

#### c ヘルパンギーナ

年間の定点当り累積報告数は29.4人で、前年の36.7人と比べ前年比0.80とやや減少した。

例年より遅く7月に入ってから増加が始まり、前年より4週間遅い第32週に定点当り4.21人のピークを迎え、9月下旬にはほぼ終息した。

#### d 流行性耳下腺炎

年間の定点当り累積報告数は41.1人で、前年の6.38人と比べ前年比6.43と大きく増加した。年間の累積報告数は、小児科定点患者総数の6.3%であった。2007年から2008年にかけて流行はほとんどみられなかったが、2009年は年初より増加傾向となり、8月以降報告数が多い状態で推移した。

#### e RSウイルス感染症

年間の定点当り累積報告数は14.5人で、前年の20.2人と比べ前年比0.71とやや減少した。年間の累積報告数は、小児科定点患者総数の2.2%であった。前年より1か月程度遅く11月下旬頃から増加が始まり、52週に定点当り2.96人のピークを迎えた。

### (2) 月単位報告疾患

月単位で報告される定点把握五類感染症(性感染症定点から報告される性感染症4疾患及び基幹定点から報告される薬剤耐性菌感染症3疾患)の報告数を表3に示した。

#### a 性感染症

性感染症4疾患のうち、年間の定点当り累積報告数が最も多かったものは、性器クラミジア感染症の39.4人で、次いで淋菌感染症の23.2人であった。性器ヘルペスウイルス感染症と尖圭コンジローマを加えた性感染症4疾患の総数は、前年比1.02とほぼ横ばいであった。

#### b 薬剤耐性菌感染症

年間の定点当り累積報告数は、メチシリン耐性黄色ブドウ球菌感染症が90.0人と最も多く、次いでペニシリン耐性肺炎球菌感染症10.4人、薬剤耐性緑膿菌感染症1.72人の順であった。薬剤耐性菌感染症3疾患の総数は、前年比1.17とやや増加した。

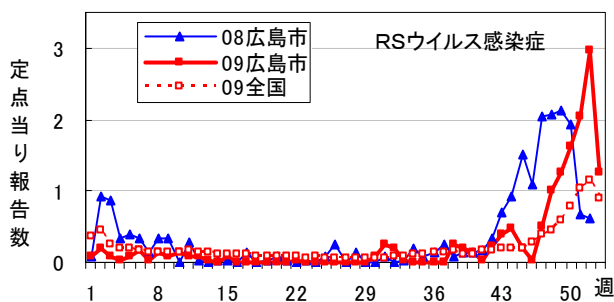
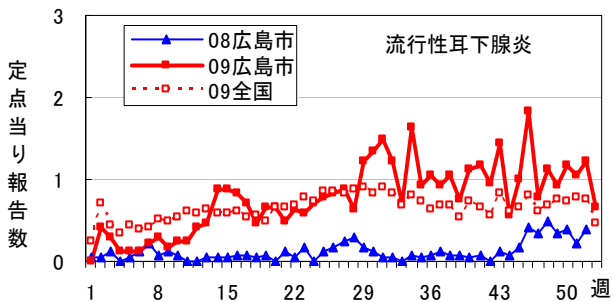
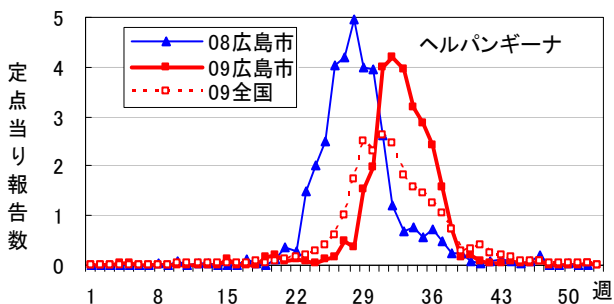
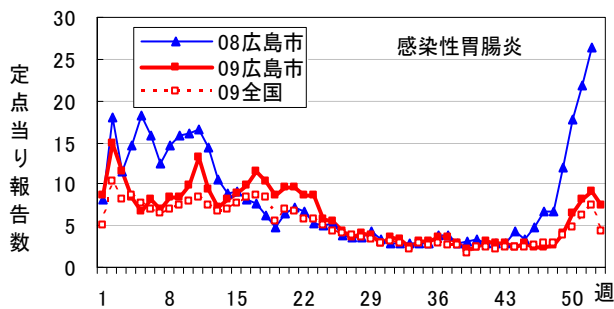
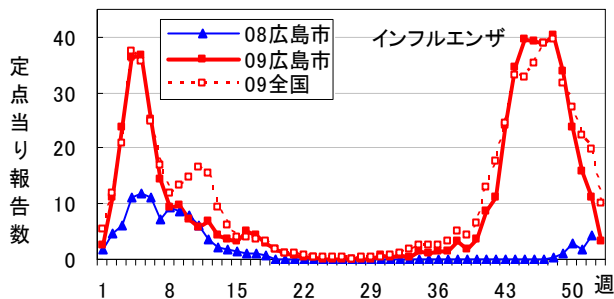


図 定点当り報告数の週別推移

表 2 定点把握対象五類感染症患者報告数 (週単位報告分) (2009年)

疾患名	報告数
インフルエンザ	20,565 (558)
咽頭結膜熱	283 (11.9)
A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	1,913 (79.8)
感染性胃腸炎	7,991 (334)
水痘	1,652 (69.0)
手足口病	290 (12.1)
伝染性紅斑	306 (12.8)
突発性発しん	845 (35.4)
百日咳	262 (11.0)
ヘルパンギーナ	704 (29.4)
流行性耳下腺炎	980 (41.1)
RSウイルス感染症	348 (14.5)
急性出血性結膜炎	14 (1.79)
流行性角結膜炎	490 (61.5)
細菌性髄膜炎	14 (1.99)
無菌性髄膜炎	16 (2.27)
マイコプラズマ肺炎(オウム病を除く)	92 (13.2)
クラミジア肺炎	0 (0.00)

( )内は定点当り累積報告数

表 3 定点把握対象五類感染症患者報告数 (月単位報告分) (2009年)

疾患名	報告数
性器クラミジア感染症	355 (39.4)
性器ヘルペスウイルス感染症	97 (10.8)
尖圭コンジローマ	75 (8.35)
淋菌感染症	209 (23.2)
メチシリン耐性黄色ブドウ球菌感染症	630 (90.0)
ペニシリン耐性肺炎球菌感染症	73 (10.4)
薬剤耐性緑膿菌感染症	12 (1.72)

( )内は定点当り累積報告数